

八十一年目の決意

栗島浦村立栗島浦中学校 3年 萱原 めぐり

あの日から八十一年目の夏を迎えた。

八月六日、広島に原爆が落とされた日。八月九日、長崎にも原爆が落とされた日。八月十五日、長期にわたった戦いが終わった日。日本人なら誰もが知っているであろう日。いや、知っていなければいけない日。そして、三月十日、東京大空襲、六月二十三日、沖縄の戦争が終わった日、終戦以降も続いたソビエト軍の侵攻など他にもあるはずだ。しかし、戦争を経験したことのない世代の多くは自分には遠い話だと思っている。この前までの私のように。

去年の夏、母に誘われて私はある大学で行われた講演会に参加した。講演会のテーマは「戦争」。そこで参加者に問いかけられた質問は「平和と戦争の境界線とは何か」だった。私は近くにいた大学生二人と考えを共有することになった。二人とも戦争についてあまり知らなかったらしい。しかし、先生や SNS を通してこの講演会を知り、参加してみようと思ったそうだ。問いかけに対して真剣に考える二人の姿を見て私は気付いた。戦争は誰にとっても遠い話ではないんだ、と。その後、沖縄戦を戦った祖母をもつ講演者の話を聞いた。お国のために死になさいと言われていたあの時代に、死にたくないと森の中を逃げ回ったという話だった。教科書で習う戦争ではない、生々しい戦争に、私は初めて触れた。

数日後、母が観たいと言っていた「満天の星」という映画を観に行った。この映画は一九四四年に、アメリカ軍による児童疎開船襲撃によって、七〇〇名以上の子供たちを含む一四〇〇人以上が命を落とした対馬丸沈没事件のドキュメンタリー映画だ。この映画では事件の背景や実態を知ることができた。特に記憶に残っているのは犠牲者や生存者に関するそれぞれのエピソードだった。犠牲者、生存者一人ひとりに家族がいて、未来があった。それがこの事件で一瞬にしてなくなったのだ。しかも、私にとって驚くことが一つあった。対馬丸の犠牲者の死体や、生存者が流れ着いたのは、以前私が住んでいた奄美大島にある、家族で楽しく泳いでいた海岸だったのだ。戦争が確実に自分事になった瞬間だった。

映画の帰り道、母は私にこう言った。

「死者数だけで見ると、犠牲者が多いか少ないかという話だけど、一人ひとりのエピソードを聞くと、この戦争の悲しさ、むなしさ、怒りは数だけでは表せなくなるよね。」

その言葉を聞いて私は気付いた。今までの戦後八十年間は、私にとってただの歴史的事実や数字でしかなかったのだ。歴史や数字を頭で理解する戦争はもちろん大切だ。だが、自分事にして心で感じる戦争は、戦争を経験したことのない私たちにとって、さらに大切なものだと思う。心で感じる戦争を知った今、私にとって戦争は、ただの歴史や数字だけで終わらせることはできないものになった。これから先、日本が二度と同じ悲劇を繰り返さないように、これからは私も責任をもつ一人にならなければならないのだ。

八月十五日に行われる黙祷。それは今までの私にとって、ただの追悼する行為でしかなかった。しかし、八十年目の黙祷は、講演会での声や映画で知った事実によって、初めて心で意味を感じる黙祷となった。八十年目の夏、私は今までで一番強く、戦争を感じた。

世界では今も、たくさんの戦争が起きている。今まで私はありがたいことに、戦争と無関係で生きてくることができた。今から八十年後、私は九十五歳として元気に過ごしているであろう。もちろん、戦争がなければ。だからこそ、まずは日本が二度と戦争を起こさないように、私は決意する。

これからの八十年に、私は責任をもつ。